長崎自然共生フォーラム News Letter

盛夏号 (第12号) 2012年8月1日 発行

論 説 —

ライフサイクルアセスメントと 環境ラベル

熊本県立大学教授 石橋康弘

ライフサイクルアセスメント (LCA : Life Cycle Assessment) は、環境への負荷を定量的に評価する方法、製品などが環境や資源に与える影響を「揺りかごから墓場まで」にわたって定量的に評価しようとする方法である。

LCA の活動は 1) 目的及び調査範囲の設定を行い、2) 対象とする製品システムの LCA における入出力のとりまとめと定義を行い (イベント分析)、3) 製品システムの潜在的環境影響の大きさと重要度把握を評価し、4) LCA の目的や調査範囲に整合させ、これまでに得られた知見を統合するものである (結果の解釈)。したがってその特徴は、

- 製品、サービスのライフサイクル全体の環境負荷を定量的に分析し、そのプロセスにおける改善方法を探るための手法である。
- 資源、エネルギー使用量と各種の廃棄物を当該対象のライフサイクル全体にわたって定量的に分析して積み上げ (加算して)、その負荷量を評価する手法である
- 基本的には集積による環境負荷を評価する手法である
- リスクアセスメント、廃棄物監査、環境管理等を補うための手法である
- コスト、品質、デザインと環境を並列させる手法である。

たとえば環境配慮型の暮らしがどれくらい環境にやさしいかを LCA 的な手法を用いて具体的な項目 (コスト、エネルギーやその他の指標) について比較をしてみると、次のようになる。

<ワンウェイ容器 vs リターナブル容器>

ビールを飲むのに缶ビールにするかびんビールにするか。どちらが環境にやさしいか。(缶ビールはレギュラーサイズ 350ml、びんビールは大びんで 633 ml、びんは 20 回使用するとしてビール 1ℓ 当りで比較する。)

- 購入コストは缶ビールで飲むと約 1.2 倍のコスト高となる
- 処理コストは缶ビールで飲むと約 4.3 倍ごみ処理費

が高くなる

- 環境負荷 (容器エネルギー) は缶ビールで飲むと約 4.4 倍環境負荷が大きい
- 結論 リターナブルびんのほうがワンウェイ容器よりも環境にやさしい

<台ふき vs ティッシュ>

(こぼれたコーヒー約 50 ml で、使用するティッシュ 5g、台ふきを洗浄するのに 1 回 20 の水道水をしようすることとし、この動作を 10 回繰り返した合計で比較する。)

- 原材料コスト ティッシュの方が 4 倍コスト高
- 処理コスト ティッシュが 2.1 倍のコスト高
- 環境負荷 ティッシュの方が 2.2 倍 BOD 負荷が大きい
- 結論 台ふきのほうがティッシュよりも環境にやさしい上に、得である

<布おむつ vs 紙おむつ>

(1 日平均 10 回で 2 年間おむつを取り替えるとした。)

- 原材料コスト 紙おむつの方が 3.3 倍コスト高
- 処理コスト 紙おむつの方が 11 倍のコスト高
- 環境負荷 紙おむつの方が 4.5 倍 BOD 負荷が大きくプラスチックの発生もある
- 結論 布おむつの方が紙おむつよりも環境にやさしい

<トレイラップ vs 簡易包装>

(同じ買い物リストで実際にスーパーと小売店で買い物をして、その包装材を比較する。)

- 購入コスト スーパーで買ったの方が 1.2 倍のコスト高
- 処理コスト スーパーの方が約 7.5 倍ゴミ処理費用がかかる
- 環境負荷 トレイ、ラップ包装の買い物をする方が、包装材のエネルギーで 1.5 倍、ごみ焼却時の塩化水素ガス発生量で 4.1 倍環境負荷が大きくなる
- 結論 生鮮食品は、スーパーでトレイ、ラップされたものを買うより小売店で簡易包装されたものを買う方が環境にやさしい

環境にやさしい暮らしの比較結果から、環境配慮型生活 (リターナブル容器、台ふき、布おむつの使用と簡易包装) がコスト、エネルギーその他の項目において優位であるこ

とが示された。(中略)

環境ラベルは、製品の特定の環境側面に関してライフサイクル全般を考慮した上で、正確かつ検証可能な情報をすべての利害関係者(ステークホルダー)が認識できる環境主張で、次の3通りがある。

タイプⅠ：環境の分野ごとにライフサイクルを考慮して認定基準を設定し、その商品について定められた要求基準を満たしているかを第三者機関が判定し、ラベルの付与を認定するもの 例：エコマーク認証制度。(JIS Q 14024, ISO 14024)

タイプⅡ：製造者団体(企業など)が特定分野の製品に対して独自基準を設け、その基準を満たしている製品に対して付けるラベル 認証の必要がない自己宣言。(JIS Q 14021, ISO 14021)

タイプⅢ：LCAにより製品の環境負荷を消費者に示すもの (JIS Q 14025, ISO 14025)

- ・ ISO規格には「省エネルギー」「省資源」「リサイクル可能」など環境主張に用いる12の用語が挙げられており、項目ごとに、定義と主張を行う際の一定の要件
- ・ 公正取引委員会では商品の環境広告に対し、5つの留意事項を掲げている。

<タイプⅡ環境ラベルの12の環境主張>

- コンポスト化可能 (Compostable)
- 分解可能 (Degradable)
- 解体容易設計 (Designed for disassembly)
- 長寿命化製品 (Extended life product)
- 回収エネルギー (Recovered energy)
- リサイクル可能 (Recyclable)
- リサイクル材含有率 (Recycled content)
- 省エネルギー (Reduced energy consumption)
- 省資源 (Reduced resource use)
- 節水 (Reduced water consumption)
- 再使用可能及び詰替え可能 (Reusable and refillable)
- 廃棄物削減 (Waste reduction)

<公正取引委員会の5つの留意事項>

- 表示の示す対象範囲が明確であること
- 強調する原材料等の使用割合を明確に表示すること
- 実証データ等による表示の裏付けの必要性
- あいまい又は抽象的な表示は単独で行わないこと
- 環境マーク表示における留意点(第3者機関：認定理由が明確にわかる表示と事業者：説明)(環境ラベル図略)

<カーボンフットプリント>

- 算定の目的・・・消費者はCO₂排出への関心を高め、事業者は削減ポイントの工程を把握する。いずれも削減が進む。
- 必要性・・・京都議定書(1990)・洞爺湖サミット(2005)・IPCC第4次報告(2007)に基づく“「低炭

素社会づくり行動計画」の見える化”への取り組み

- 算出方法・・・LCA手法によって原材料調達からリサイクルまでの各段階で排出されるCO₂排出量を計算
- 第3者による検証制度と表示・・・研究会・検討会(2008)によりガイドライン・算定手法・制度構築(国による委員会)の試行(統一マーク・共通ラベルの表示)

このほか、製品のライフサイクルのなかで発生する定量的な環境負荷値を開示する制度による、エコリーフ環境ラベル(製品環境情報・開示シート・データシート)があり、企業と消費者間に良好なコミュニケーションをはかっている(社団法人産業環境管理協会)。

(本稿はH24.2.13 ECANで講演された内容を事務局の責任で要約したものです)

平成23年度研究会報告

事務局

1回目の研究会は早瀬委員のご苦勞により、7月6日(水)18:30から長崎市民会館2F第4会議室で開かれた。環境省総合政策局環境影響評価課 鈴木啓太係長から、「環境アセスメント～審査の現場と法改正」のお話をうかがった。

アセス法(環境影響評価法 1997)制定以来、初の法改正が行われたとのことである(2008)。アメリカでのアセスが動き出して(NEPA、1969)から数えると40年経たことになり、また旧アセス法が審議未了で廃案(1983)となっても25年は経っているとのことである。遅速ではあったが、我々は環境基本法(20条)でアセスの推進がうたわれていることは大きな飛躍だったと理解したい。

今回の法改正のポイントは戦略的環境アセス(SEA: Strategic Environmental Assessment)が導入されたことである。同時に配慮書→方法書→準備書→評価書→報告書なる手続きが整理されたことである。SEAの大きなポイントは事業の計画段階での環境配慮書の手続きの新設である。一定規模の道路・空港・新幹線・発電所・送電線・・・、もちろん原発も例外ではない。審査前の縦覧義務化と報告も見逃せない。SEAについては、たとえば「区域」の中に規模・構造を含めるか方式は未確定とのことであるが、“柔軟な制度”にするとのことである。後半の法改正に至る事務局の苦勞話は、現実の社会を如実に現しており、プロセスの大切さを改めて感じた。

(主な質問)

1. 原発の場合のレイアウトはどうなるか?
2. 代替案の提示は難しいのでは?
3. SEAに関して自民党と民主党への説明作戦は?
4. 事後調査の報告義務は?
5. 環境省意見にある“モニタリング”の有効性は?

などなど多くの質問がなされた。福島原発事故の直後でもあったせいか、会員の意識の高さを感じる研究会であった。以前から、県の現場でも計画アセスメントが話題となり、

条例化が云々されたものの経済優先の県勢では少数意見に甘んじるほかなかった。今回は、手続きの新設であるから真の意味の計画アセスにどう近づけるか、制度運用者の努力が要求される。しかし中央政府の後押しでSEAが普遍化・独自化されると、地方レベルでの環境政策は飛躍的に発展するであろうとの想いを強くした。(参加者 早瀬・菊池・川里・来崎・中島・宮原・佐藤・鈴木・吉田・エコ塾生、ABC 順)

長崎県菜の花交流会開かれる

事務局

昨冬12月4日(日)午後、大村市富の原 郡コミュニティセンターで、長崎県菜の花交流会実行委員会主催・長崎県県央保健所地区協議会共催で開かれたので、聴講した。会は司会者の姫野順一長崎大学大学院教授(当会幹事)の開会あいさつに始まり、赤木 聡長崎県未来環境推進課長のあいさつと特別講演、特別報告、パネルディスカッションなどで進化した。

特別講演は、NPO 菜の花プロジェクトネットワーク代表で滋賀県環境生活協同組合理事長でもある藤井洵子氏の「菜の花プロジェクトの展開～食とエネルギーの地域自立を目指して～」であった。藤井氏は、冒頭、琵琶湖と原発問題、合成洗剤(CP)と赤潮(アオコ)を当時の竹村知事と共闘したことに触れ、ブラジル・リオ宣言(1992)以後、エネルギー問題に関わって堂本暁子さんと中央公害審議会委員も経験し、1998年に菜の花プロジェクトを立ち上げたという。農業再生をうたって麦畑の裏作・放棄畑・バイオ再生によるエネルギー問題に立ち向かい、菜の花議員連盟を結成して貰った経緯もあったらしい。菜の花プロジェクト(以下、N-Projectと略す)の新しい局面は、ロシア・チェルノブイリでの菜の花プロジェクトであり、日本：福島原発・飯館村などでも土壌から流れた水をなたねで吸い上げバイオガスとして利用できないか実験中である。結論として原発依存、化石燃料依存から次の燃料段階へのステップを制度・仕組み問題(国)だけではなく、生活レベル(地域)で考えたいということであった。

特別報告では、「バイオディーゼル燃料の現状・展望について」(東川圭吾：県環境保健研究センター研究員)、「社会福祉法人コスモス会雲仙ブロックの取り組み」(薄田良二：コスモス会)、「富永製油の製油活動(富永 登：富永製油)」、「農家所得保障制度について」(本村咲子：長崎大学環境科学部4年)についてそれぞれ含蓄のある発表があった。とくに富永氏は乾燥なたねからの製油方法について詳しい説明のあと、収穫機械の小型化による作付け面積の増加・美観・土壌肥料・個人による作付けの楽しさ・無農薬でできる(ツバキ・なたね)栽培など課題を指摘した。休憩タイムにはBDF車デモ(コスモス会)もあり、その後実行委員会各団体の報告があった。地球環境市民(安永知弘)、菜の花まつりIN高田(井上憲次)、川頭有機農業研究会(石橋

清人)、スナメリの森(加固治男)、雪浦学生取り組み(石橋洋平)の各氏である。このほか諫早シチメンソウの会のネットワークへのリンク、長崎総科大学生グループの古紙回収などの報告もあった。

パネルディスカッションは姫野教授の司会により藤井、東川、各団体代表による討議が行われた。藤井氏は改めて「地域でのN-Projectの芽生えを強く感じる、楽しくやりたい。仲間を増やし、全国的つながりの流れをつくり、高校生大学生中心の菜の花学会をつくり訪問し合い、技術向上させる地域と大学との連携を考えたい」と強調し、菜の花が少なくなった理由は何か?耕作放棄地利用とイノシシとの戦いは?などフロアからも熱心な質疑があった。草刈機にガソリンとなたね油を混ぜる話からなたね油の多様化を期待する声もあり、水田のヘリコプター消毒により田んぼから2km離れて養蜂せざるを得なくなったなどの意見もあった。姫野教授はネットワークを活用し、地産地消の輪を広げることの重要性をのべて、討論を締めくくった。最後に「なの花畑」の歌を合唱して大会宣言「ライフ・スタイルのチェンジ」を採択して終了した。

大村湾とバイオリギング

事務局

“バイオリギング”と言う動物行動測定法で、回遊魚の生態を研究している長崎大学大学院付属環東シナ海環境資源研究センターの川邊 玲先生は、ヒラメが大村湾と東シナ海を往来していることに目をつけ、「摂餌場」と「産卵場」に水温差があることを突き止め、外海生まれの仔魚や稚魚が大村湾に回帰してくるのを確認中とのことである。つまり大村湾の水温は10℃を下回るが、五島灘では15℃までしか下回らないという季節変化がある。電子タグを取り付けたヒラメは、海底魚なので潮汐による水深の変動をしっかり記録する。産卵期を迎えたメスのヒラメは、2月頃から4月中旬くらいに大村湾をでてより暖かい東シナ海に移動することが考えられ、大村湾はヒラメにとって「生育場」であり五島灘(東シナ海)は産卵場ではないかと推測している。もちろん親になるまで大村湾に生息しているので、大村湾の環境や生態系の劣化は生育場の機能を損なうことに警鐘を鳴らしている。(スナメリかわら版 2012春Vol125:最終号から拾い読み。大村・本堂川のゴミ拾いも少しは役立っているか……。編集局)

辺境の集落から幸福の里へ～大村のチベットから大村のブータンへ

事務局

数十年昔、「とりかぶと」がある大村市中岳町南川内一帯は“炭焼き”で繁栄したが、交通の便が悪く大村のチベッ

トと言う人もいた。現在、「とりかぶと」一帯は地域活性化の輪を投げかけていると見る。というのは、たまたま昨年10月に母校山岳部の創部60周年記念式典に出席して、“ブータンヒマラヤの自然と登山—千葉大学のヒマラヤ(2011: 千葉大学学土山岳会編)を読んでその想いを強くした。折りしも昨年11月に非常に親日的なブータン国王夫妻が来日された。

ブータンは人口約70万人、国土は九州の広さに少し足りず(38,000 km²)で、生活の中心が仏教の国である。10年前に鎖国が解かれ、現在、急速な近代化による、車、携帯、ゴミなどの増加が社会問題といわれる。半世紀前、「秘境ブータン」(中尾佐助: 大阪市立大)ではチベット仏教信仰の影響を受けて気候風土に馴染んで自然と共生せざるを得ない環境が紹介されたが、“他人の幸せも本人の幸せに考える”国民の気質を踏まえた、国王の“国民総幸福量”(GNH:1972)の発想はすばらしい。首都テンペーの一部ではゴミの分別収集も行われているようだが、追いつかない。当地の市役所で頑張る、JAICA出身の中島民樹青年のゴミ収監ルート作戦が最近テレビで紹介されたが、住民の意識ギャップにも細かい気配りをしている姿に感動した。微生物による新しい処分場を検討中との紹介もあった。日本人の若い人もしっかりしている、奮闘を期待したい。

ともあれ、エネルギーも含め循環型社会はヒトの体と同じく一つ一つの細胞がしっかり連結しないと機能しない。その意味で「とりかぶと」周辺は絶好のフィールドだ。志賀直哉の「新しい村」ではないが、ソフト・ハード両面で実践の可能性は高いと期待している。

改めていうが、森に囲まれて水は南川内川と、最近、掘り当てた地下水で豊富だ。村内の草木類は生態的に多様性が高く、野鳥も多い。水洗の下水処理も配慮されて衛生的、残飯類をイノシシが食べてくれるのはありがたい。大抵の廃棄物は風呂焚き時に始末できる(大型プラスチック類の域外搬出はほとんどない)。ソーラー盤も設置されている。畑からは無農薬の野菜がとれる。良質の緑・水・土の三拍子に加えて自然エネルギーも供給され、内部構造が見えるユニークな建物のバランス良い配置(風景的にはオーバーユースか?)、絶え間ない人手が加わって、それにイベントの時など若い学生さんや近隣のおばさんたちが手伝いに来てくれる人間関係がある。「とりかぶと」一帯はまさしく小さな循環型社会だ。“自然を社会のかたち”をモットーとするオーナーの姿勢を心から賞賛する。ヒトの命には限りがあるが、このような小社会をつなぎ合わせた里づくりを展開する、大村の“幸福の里”は持続させたいと常日頃、想っている。(川里弘孝)

大村：大上戸川でリバーウォッチング開かれる

事務局

昨夏の7月26日(水)午前中、いつもゴミ拾いしている大村：大上戸川(水田橋付近)で子供たちのリバーウォッチングが開かれた。川の生き物を親子で観察しようというもので、付近の幼稚園・保育園児と母親たちが、関係者を含め50人近く集まったようだ。夏の数回、市内の郡川や鈴田川など流れがきれいな場所で、市の環境保全課が主催して行われている。大上戸川の各地にも適地は数箇所あるが、在郷者としては気持ちがいい。しかも定期的に清掃している者にとってこのような場所に使われるのは、生き物が多様なことを認められたようで、若干、くすぐったい。以前にも書いたが、「ホモな世界にヘテロな物は持ち込まない」ことは生き物にとって大事なことだ、と改めて実感した。

最近の読書から(1) —

「日比谷公園」は工学系か農学系か?

日本最初の洋風公園として明治36年に開園した“日比谷公園”は三つの洋すなわち洋花・洋食・洋楽で文明開化の象徴となった。戦時中は死体の仮埋葬場となったり、バブル景気時にはアベックが愛を語ったり、移り変わる時代の中で東京の生活文化に寄与し続けてきた、百年公園である。当時、造家学(建築学)の長野金吾博士と造園学(林学・園芸学)の本多静六林学博士との設計競争があった。本書では、とくに現在、工学系・農学系で設計の別れ道がある、公共造園の科学、芸術、技術の歴史を見ることが出来る。本多チームの和魂洋才の総合判断力は、時流を読む鋭い直感力と調整力ともいう、気配りの成果と著者は言う。巻末の日比谷公園生活史年表は専門家にとっても良き参考となる(「日比谷公園」(進士五十八)2011. 223pp. 鹿島出版会)。(川里弘孝)

最近の読書から(2) —

「江戸時代の遺産～庶民の生活文化」から、当フォーラムの原点を再認識する

本書(スーザン.B.ハンレー: 指 昭博訳 1990. 234pp. 中公新書)は、20年前の新書版なので既に読まれた方もあると思うが、エール大学(院)出身で現ワシントン大学教授である、女性学者の冷静な比較文化論は確実な史料の裏付けで日本人の文化の源が江戸時代の庶民生活にあったことを的確に指摘している。日本も欧米も封建制と工業化

を経験したにもかかわらず、日本人と欧米人の違いは何か？日本が奇跡を起こしたことの疑問～「貧しさ」の脱却を「墮胎や間引き」から考えたと言う。学者・研究者の感覚は鋭い。詳しい流れは、§1 宿の増加と生活水準の向上、§2 資源を有効利用する文化～潤いのある質素さ、§3 質素でも健康な生活、§4 都市の公衆衛生の発達、§5 近代化する家族構成、§6 江戸時代から明治への安定した移行期、§719 世紀の日本と西洋～物質文化の比較、と続いている。想うに、本会の顧問である池田武邦先生の考えに沿って立ち上げたフォーラムであるが、その源となった“江戸時代の賛歌”が本書によって再び理解できた。先生の先見性に改めて共鳴し、関わっていただいたことに深く感謝したい。(川里弘孝)

最近の読書から(3) —

「希望という名の絶望」医療現場から平成日本を診断する(里見清一)から考える

事務局

著者は昭和大学病院精神科の准教授であるが、今の日本の医療行政の本質を突いた警告を発している。結論はこうだ。現在の医療行政は中央集権の拡大を呼び、診断基準が異なる診療結果となって、精神科の臨床においてもウソか根拠のないファンタジーが見られると言うのだ。「まやかし」「騙し」について実際の症例を呈示することを目的として述べられたもので医療の行き詰まりに警鐘を鳴らしている。

医者や病院のみならず、患者側に問題がある場合やそれ以外の事務が重要である医療において、ミスリーディングが生じる原因をいくつかの側面から述べている(例えば統合失調症とパーソナリティ障害とはどう違う?)。

医者と患者との間に存在する領域～メディア・医療費の問題、医療システムの問題、サプリメントなど代替医療や新臨床研修制度にも疑問を投げかけている。病変・誤診をどう捉えるか、大学病院は文部省、一般病院は厚生省の所管であることの違いは何か？われわれは自己判断でしか命を守れないのだろうか。(里見清一著、2011. 247pp. 新潮社。)

サケの旅から“巨大地震と生物多様性”がわかる！？～Green Letter:No.33(2011)から

事務局

本年号は地震学者(島村 英紀氏)とのインタビューに始まり、“旅する自然”での特集は、獣医師・写真家(竹田津 実氏)の「テンペアの旅。サファリの旅」から宇宙科学者の「はやぶさの旅」、鳥類研究者(尾崎 清明氏)の

「アホウドリの旅」など、科学・技術の先端をゆく日本の力を見せつけてくれる。

生命科学者(井田 斎(ひとし)氏)の「巨大地震と生物多様性：サケの旅」は、サケ科の特徴である母川回帰の落第生(環境の変動期に母川回帰が出来ない劣等生)が種を守る話は泣かせる。孵化・放流など増殖事業の見直しなど資源再生の危険分散の提言：各河川の親魚の一部自然産卵を述べている。

昆虫研究者(金沢 至氏)の「海を渡って旅するチョウ」も秀逸だ。既にアサギマダラのマーキング調査での、鳥類・昆虫類の定位と太陽コンパスなどとの関係解説は、ブータンアサギマダラ(だったと思う)の新聞記事と併せて興味ひかれる。これらの話は、われわれの身近な自然でも通用することばかりだ。

極め付きは、座談会「人が旅するのは」である。旅行ガイドブック歴40年の編集者(森田 芳夫氏)と環境デザイナー(秋山 智弘氏)、司会のグリーンレター編集長(瀬田 信哉氏)とのヒトの核心をついた「旅論」はモーツァルト・ベートーベン・ヨハンシュトラウスの「3本のタクト」で終わらすなどにくい演出だ。(年1回発行の本誌は千200円切手を同封して富士フィルムグリーンファンドに申し込むと入手できる。)

ブックガイド

(今季号は専門書ではなく一般書)

- 「貧者を食らう国～中国格差社会からの警告」(阿古智子) 2009. 202pp. 新潮社。

(本紙第11号で紹介した、「日本の官僚」：櫻井よしこを読んで中国は怖い印象を受けたが、本書で特に農村出身者の現実を知るに人権をも否定する、さらに中国の恐ろしさを認識した。高速鉄道事故の列車をすぐさま埋める位のことは日常茶飯事なのである。)

- 「ブータン、これでいいのだ」(御手洗(みたらい)瑞子(たまこ)) 2012. 224p p. 新潮社。

(美人の若い女性に似合わず、残業0の国家公務員の経験を生かし、鋭く国民性や住民の生活に言及している。クリーニング屋からもどってきた片腕のないセーターに“んもう！”と言いつつ、王宮の窓から見える美しい景色が、袖のことを吹き飛ばしてくれるとは！泣かせるなー。何もやってなくても自信満々、激しいまでの自己肯定力の話は本物だ。)

- 「自動車と建築～モータリゼーション時代の環境デザイン」(堀田典裕) 2011. 219pp. 河出ブックス。

(名古屋大学大学院都市建築環境学の少壮研究者である、筆者は自動車がどのような「環境」を生み出し、どのような理論を醸成してきたかを実証している。自動車という切り口で「環境の歴史」を述べて、わが国の成熟した社会の中で何を評価し、現代建築の何を増改築すべきかと問題提起している。書評にあるように安易な自然への

迎合を否定した建築家たる自身を覗かせる。特に第2章：スカイライン・ドライブウェイ・パークウェイの建築で、国民宿舎・国民休暇村、立山黒部アルペンルートを取り上げ、ソーシャルツーリズムに言及しているのがにくい。）

●「武士の家計簿」(磯田道史) 2011. 新潮新書。

(金沢藩の猪山家は代々御算用者つまり加賀百万石の算盤係：前田家の会計処理専門家であった。直参ではなかったが、江戸時代の行政の弱点(経済のできる人材がない)をカバーした、身分制度の厳しい中、武士と百姓の間層が政治に大きな影響を与えた存在といわれる。猪山清衛門から6代続いた後、信之～直文～成之の3代は江戸末～明治維新～大正初を経済のプロとして生き抜き、海軍省の重鎮となった。著者は偶然に発見した猪山家の史料を丹念に掘り起こし、“今いる組織の外に出ても必要とされる技術や能力をもっているか”が人の死活を分けると鋭くついている。大きな社会変動の時代にある我々の生き方に通用する示唆を含んだ新書である。)

●「原発はいらない」(小出裕章) 幻冬舎ルネッサンス新書。238pp.

(原子力研究者らしく淡々と放射能の恐ろしさを知らしめている。11万トンの放射能汚染の行方を心配、福島県的一次産業を崩壊させず、原子力の安全性は妄想にすぎず、行政・電力会社の圧力に負けず目先の大金の誘惑に揺るがない真っ当な一人ひとりの生き方を求めている。40年間に及ぶ原子力廃絶の訴えをひしひしと感じた。)

●「岐(わ)かれ路」(春話二十六夜) (坂東真砂子)。238pp. 新潮社。

(財)日本浮世絵博物館の協力を得て書かれたので、絵作者・年代・タイトルが記されている。章ごとにある浮世絵一枚一枚の絵に沿って、物語が展開してゆく。女性らしい文章で表現も優しく、艶やかだ。同じ江戸庶民文化を扱った「江戸の性愛」：渡辺信一郎(新潮新書)とは異なった趣きがある。研究者と作家の違いであろうか、最終章はロマンを感じさせる。)

●「ダーウィン自伝」(チャールズ・ダーウィン：八杉龍一・江上生子訳) 376pp. ちくま学芸文庫。

(孫娘ノラ・バーロウの編集による無削除決定版：新妻昭夫解説で、ダーウィンの青年・中年・老年時代の事実が語られている。あの膨大な「種の起源」をもたらした、もともとは地質学者・博物学者の生き様：ダーウィン自身の人物評(とくに祖父と父親、後輩のS・パトラー)や家族への想い、思想形成過程などに接するに偉大な先駆者にある種の親しみを覚えた。)

●「あの川のほとりで」(ジョン・アーヴィング・小竹由美子訳) 2012. 上・下 新潮社。

(超大作なので未読だが、書評を読むととめどない奔流に浸るような物語性とニューハンプシャー州の奥地における目配りの効いた細部描写、暴力におかされた現代アメリカへの批判も誠実に語られているという。)(川里)

事務局だより

- Save Japan Project：多良山系の生物多様性を守り、育てる！にご協力ください。本会は、とりかぶと自然学校：大村との協働で日本環境教育フォーラムの助成を受けて、オオキツネノカミソリやヤマネの保護・保全事業を展開しています。自分のできる範囲でのご助力を熱望します。(連絡は事務局へのメールか川里 090-1192-4811 まで)
- 松尾公則氏(本会幹事)“ながさき人物紀行”(長崎新聞)に登場！6月30日(土)付け紙上に大きく取り上げられた。野生動物への氏のひたむきな研究態度は全国レベルだと思われる。テレビでお馴染みだった故千石正一氏とも親交が深かった。上記プロジェクトにも協力願っている。県生物学会副会長でもあり、NBC(TV)にも出演。
- Eメールのアドレスをお知らせください。郵送料節約のため、会員への連絡はEメールで行うよう試行中です。未登録の方、是非お知らせください。
- 除籍者 生野信一郎・馬場竜彦・河村好朗・田島幸一
- 3ヵ年会費未納による除籍対象者 生野信義・平野実・豊里一朗・石橋康弘(1年分でもお支払いください！)

編集後記

初春号のつもりが盛夏号にずれ込んでしまった、お詫び申し上げます。5月29日に、山中孝友さん(大村湾再生研究会代表)が主催するNPOが諫早・喜々津川で子供たちへのアピールを実施して、テレビでも紹介された。貝殻蛇籠を沈めて大村湾の水質を浄化する試みである。まさしく自然共生事業だが、お誘いを受けながら寝坊して不参加してしまった。貴重な体験機会を逃がしてしまい記事も書けない。情けない話だ。(K)

【編集部から】

原稿を募集します。論説・随想・紀行文・技術報告・写真等、体裁は問いません。500～1,200字程度でお願いします。二段組みはこちらでやります。E-mailでの投稿、大歓迎です。(M) (nagasaki_coexistence@hotmail.com)

事務局	会長	宮原和明
	〒850-0036	長崎市五島町3-3-206
		NPO環境カウンセリング協会会長崎
	TEL: 095-818-3305	FAX: 095-826-3693
		枚: 090-7161-5408
	HP:	http://www.nature-man.org/index.html
	E-mail:	Nagasaki_coexistence@hotmail.com
アネックス1	事務局長	川里弘孝
	〒856-0824	大村市水田町1098
	TEL: 0957-50-1355	FAX: 0957-50-1355
アネックス2	副事務局長	為永一夫(県央地区担当)
	〒856-0820	大村市協和町790(株)タメナガ造園
	TEL: 0957-54-0271	FAX: 0957-54-1127
アネックス3	副事務局長	赤瀬憲市(県南地区担当)
	〒851-0104	長崎市船石町1184(株)水樹
	TEL: 095-839-1860	FAX: 095-839-9103
アネックス4	副事務局長	田雑豪裕(県北地区担当)
	〒857-1161	佐世保市大塔町574-5(株)庭建
	TEL: 0956-31-2011	FAX: 0956-31-2310